

4-1-6-12 リハビリテーション科

1. リハビリテーション科の特色

従来、臨床医学における意思決定は経験に基づく判断が主であった。しかし、近年、臨床医学の分野全般に evidence-based medicine (EBM) が提唱され、疾患ごとに治療ガイドラインが作成されるようになった。

小児医療においても、胎児、新生児医療の進歩により、早産、低出生体重児の救命率は向上したが、脳性麻痺などの運動発達障害や、精神遅滞、学習障害、自閉症などの精神発達障害も発生率はむしろ増加している。

そのような流れの中で、脳性麻痺児の治療では、病院での NICU での集中治療を終えた後、施設入所による集団療育ではなく、在宅での通院による個別療育を選択することが主流となり、より質の高いリハビリテーションが求められている。

理学療法の分野では、従来のファシリテーション療法のみの治療が再検討され、装具療法、座位保持装置、車椅子、などがさかんに用いられるようになり、新たにボツリヌス毒素、バクロフェン髄腔投与療法、選択的後根切除術などの痙縮抑制療法が導入できるようになり、治療の選択肢が増えている。

つぎに**作業療法**では、精神発達障害に対するリハビリテーションとして、日常生活動作の自立に向けた作業療法のほか、感覚統合障害に対する感覚統合療法、生活の構造化を主眼においた TEACCH プログラムなどが導入されつつある。

さらに、**言語療法**については、新生児の難聴を放置することは、成長過程で言語能力や知能の発達に悪影響を及ぼすことになることが明らかとなり、新生児に聴覚スクリーニング検査を実施し、耳鼻科、言語聴覚士による精密検査、補聴器、訓練が提唱されている。また、先天的口蓋裂、鼻咽腔閉鎖不全などの手術前後の構音障害の言語訓練が言語発達にとって重要であるとされている。

しかし、これらの治療法をどのように選択し、どの程度の効果が期待できるのか、いつ導入したら効果的なのか、併用療法の効果、治療のエビデンスについてのデータベースの確立が早急な課題となっている。

2. 診療活動、研究活動

2.1 リハビリテーション診療活動

成育医療センターリハビリ科では、毎週水曜日、新生児室への回診を行い、多くの遺伝子疾患、先天奇形、低出生体重児などについて、無気肺などの呼吸障害、筋緊張の異常、異常反射、四肢の変形などの障害に対して、早期発見、早期治療介入を行っている。また、人工呼吸器を使用している患児の在宅へ向けての家族へのリハビリ指導、座位保持椅子、車椅子などの製作を行っている。

一方、退院後は、リハビリ外来、装具外来で定期的診察を行い、発達評価、訓練指導、装具作製、家族へのリハビリ指導を行っている。特に、運動発達障害、呼吸障害、関節変形、拘縮の顕著な患児については、**理学療法**を外来にて実施している。**作業療法**では、身体障害に対するリハビリテーションとして、日常生活動作の自立に向けた作業療法、装具、自助具の作製のほか、精神発達障害に対しては、感覚統合障害にともなう不器用さに対する感覚統合療法を行っている。さらに、**言語療法**については、新生児の難聴を放置することは、成長過程で言語能力や知能の発達に悪影響を及ぼすことになるので、新生児に聴覚スクリーニング検査を実施し、**言語聴覚士**による精密検査、補聴器訓練を行っている。また、先天的口蓋裂、鼻咽腔閉鎖不全などの手術前後の構音障害の言語訓練を行っている。また、ことばの遅れを主訴として来院される小児に対して発達評価、言語評価を行い、訓練を実施している

2.2 研究活動

脳性麻痺児の運動障害、日常生活動作の国際的評価法として、GMFM、PEDIなどが翻訳され、日本

に導入された。この評価法の妥当性、信頼性の検討を行い、予後予測に役立てるための検討を行っている。

先天性上肢欠損の患児に対しては、残存筋の筋電信号を利用し、電動義手の開発を行っている。

また、痙性歩行により、つま先で歩行している脳性麻痺児に対して、痙性抑制足底装具を開発中である。現在、この装具の装着による効果について、筋電図、エネルギー消費量(PCI)、歩行分析を用いて検証している。

3. 研修活動

3.1 理学療法、作業療法士の学生臨床実習、見学

2003（平成15）年4月～2004（平成16）年3月 理学療法士学生2名臨床実習

2003（平成15）年4月～2004（平成16）年3月 理学療法士学生8名見学

2003（平成15）年4月～2004（平成16）年3月 作業療法士学生1名臨床実習

2003（平成15）年4月～2004（平成16）年3月 作業療法士学生5名見学

3.2 呼吸リハビリテーション実習

2003（平成15）年3月8日～3月12日 小児科研修医実習1名

4. 社会的活動

4.1 第3回世田谷リハビリネット報告会（平成15年12月6日）発表

佐藤裕子：育児不安を抱える母子へのチームアプローチ 摂食指導を中心として

武藤敏夫：家族の障害受容と地域で生きていくための援助

鈴木直子：学童児ケースの地域との連携について

仲 貴子：就学、復学困難例の報告 主として社会的要因によるケース